

第5回総会、日程決定!

【日程】11月9日(日)

【場所】杉並公会堂(東京都杉並区)

今回もご報告が盛りだくさん、今からぜひご予定の調整を! 詳細は改めてお知らせします。



●第5回公式訪問報告 Part 1



放牧から帰ったナフィサ(4年)。村の羊を各家庭が交代で面倒を見なければならないが、父親が病気なので、今日は彼女が学校を休んで、山に連れて行った。背のザックには山菜がびっしりと詰まっていた。家族で食べるのだという。

会員の皆様、お変わりなくお元気でお過ごしでしょうか。東京の桜は終わってしまいましたが、アフガニスタンは今が春の真っ盛り。桃、アンズ、アーモンドなどの花々が峡谷を美しいピンク色で飾ります。

子どもたちも新学期に心をときめかせ、花が色とりどりに咲く山道を駆けて通学していることでしょう。

「去年は日本からたくさんの人(4人)が来てくれたなあ。今年は何人来るのかな。写真や本は持ってきてくれるのかなあ」と楽しみにしているだろう子どもたちの顔を思い浮かべていた矢先、現地から新校舎建設計画のニュースが届きました。すぐにも情報収集が必要だと思いましたが、あいにく私は春の日程の都合がつかないため、今年度は副代表の比留川と会計の森に行ってもらうことにしました。これまで2度、現地を訪れたことのある2人は、9日間の訪問を終え、無事帰国いたしました。今号ではそのご報告をいたします。

山の学校を支援する会も5年目に入り、これからは、「支援する、される」だけではなく、会員の皆様と共に新しい交流の形を考えていきたいと思っています。それを踏まえ、前回の運営委員会では、「山の学校支援の由来」を紙芝居で作って持っていこう」とか、「山の子どもたちに、『ほくたちの一日』などを描いてもらって紙芝居を制作しよう」という楽しいアイデアが生まれました。全国の会員の皆様からのご意見やアイデアをお待ちしております。

5月、シルクロード取材を前に

長谷川洋海

# 新校舎建設計画！

## 第5回公式訪問報告 パート1

【4月1日～9日】

「新校舎建設」の知らせを受けて、急ぎよ、長倉代表に代わって現地入りすることになった比留川と森ですが、カブール在住の安井さんの全面的なご協力のもと、無事、現地訪問を終えることができました。以下、現地で収集した情報を2回に分けてご報告いたします。

### 新校舎建設について

サフダル校長の話によると、国が8万米ドルの予算を計上し、現校舎の近くに土地を買い上げて新校舎を建設する予定で、現校舎も継続して使用されるということです。まだ設計図もなく建設会社も決まっていますませんが、年内の完成を目指すようです。

建設場所は、学校のすぐ上の橋を渡ったところ、川沿いの土地(25m×35m)。会報7号に掲載の「山の学校大図解」のイラストにも描かれているくらい近いところにある土地ですが、どこまで平らに整地できるのかと思うほどの急斜面です。

新校舎には6教室ができる予定。現校舎の6教室+職員室兼図書室と合わせてポーンデ小・中学校となり(共学)、1年生から9年生までが学ぶ予定です。

昨年までは6年生までが共学で現校舎で勉強し、7年生からは男子は下の町(バザラック)の中学校へ、女子だけの7年生と9年生は少し離れた臨時の別棟で勉強していました。その後、

女子9年生は卒業、7年生は学年成立に必要な最少生徒数の12名を下回ったために解散となっていました(別棟は閉鎖)。

今年度は1年生から7年生(すべて共学)なので現校舎では1教室足りず、2年生がコンテナを教室にしています。鉄のコンテナの扉を開け放して中に机を並べて勉強していますが、ポーンデは寒暖厳しく、コンテナでの勉強は過酷です。このような状況の中、突然の知らせではありましたが、新校舎建設という政府による具体的な復興案が浮上したことを喜ばしく思います。ただ、施工計画はまだまだ見えない部分も多く、今後の進行を慎重に見守らなければなりません。

### 教員不足と先生方の頑張り

現在、山の学校の教職員は、教員が校長を含めて8名、用務員が3名の計11名。用務員3名は3交代で夜警も務めています。現7年生が9年生になる2年後には9学年となり、明らかに教員不足です。教育省の規定では

この規模の学校には教員12名と用務員4名、計16名が必要なのですが、政府に補充を要請しても「全国で1万数千名も不足しているから要請に応えるには40年かかる」との返答で、すぐの補充は見込めません(もちろん継続して要請していきます)。

先生方は「山の学校の会の支援で雇ってもらうにしても相当な額がかかるだろうから、自分たちでなんとかするしかない」と少ない人数で頑張りつてくれています。実際、先生方は昨年夏の現地訪問時に手配した2日間の研修のほか、冬に1か月間、バザラックで実施された研修に参加して、その成果が授業にも反映され、手応えを感じているようです。「今までは生徒に復唱させるだけだったが、今は生徒に読ませて先生がチェックする方法を採るようになった」、「グループ学習を導入し、グル間で競わせることもある」、「生徒たちが興味を持てるように、教師みんなが工夫するようにになった」と口々に話している子どもたちも「以前より授業が分かりやすくなった」と喜んでいきます。

### 教員研修の支援

そうした折に、政府から山の学校の教員全員に対してパンシール大学でこの春から実施される3年間の研修プログラムへの参加要請があったとのこと。これは、教育省で推進する現職教員向け研修プロジェクトの一環

で、修了すると大学から正規証明書が授与されます。大学はバザラックから車でカブール方面に1時間ほどのダシュタックという町にあり、授業は3年間、毎日午後1時半からです(山の学校の授業は12時まで)。

受講するための問題は交通手段。女性教師2名とコーラン・イスラムを教える高齢の先生を除く5名の先生方が「交通手段さえ確保できれば受講したい」と希望しています。先生方の頑張り子どもたちの学習意欲を高め、学力向上につながります。また、ようやく国が動き出して与えてくれたチャンスです。私たちは会として先生方がぜひこの機会を生かせるように教員研修受講の手助けをしたいと思ひ、通学の便宜をはかることにしました。

その交通手段として先生方や安井さんといろいろ検討した結果、山の学校の車とモーターバイク1台を併用することになり、中古バイク(610ドル)を購入しました。具体的には、バザラックとダシュタック間は山の学校の車を使用。行きは山の学

校から大学まで車で行けませんが、帰りは車庫のあるバザラックまでなので、ポーンデ近辺に住む2人の先生がバイクを使用します。

バイク併用の最大の理由は、車だけを使用する場合と比べてガソリン代と車のメンテナンス費を大幅に抑えられるからです。また、ポーンデにバイクがあれば、緊急時にバザラックにある車の出動要請に走るなどの対応も可能です。ガソリン代は月400ドル増(見込み)になりますが、原則として領収書をもとに後払いとすることにして、安井さんにお預けしてきました。

また、給与支援を一人につき月額で10ドル増額することも決めました。物価上昇が非常に激しく、特に主食である小麦粉の高騰は想像以上で、先生の給与だけでは家族の小麦粉1か月分も買えない状況だそうです。このような現状を考慮し、給与支援の増額を決めた次第です。文/森桂子、写真/比留川征子

次回は子どもたちの様子や図書についてご報告いたします。

コンテナで勉強する2年生たち





窓辺でほほ笑むマリナ

昨年、公式訪問の一員として初めて山の学校を訪れた  
運営委員・高橋美香が綴る、  
アフガニスタンの子どもたちへの思い——

## あの山で 世界で一番の 笑顔に出会った



今まで遠い異国だと思っていた国が、人との出会いによって急に身近に感じることがある。長倉代表の写真を通じて出会った山の学校の子どもたちの笑顔が、アフガニスタンを身近な国へと変えてくれた。とりわけ、会報第7号の表紙の写真、家の手伝いのせいかカサカサになった手で握った、貰ったばかりの新しい筆箱を手にしたあのマリナの微笑みは衝撃的ですらあった。いつかこの子の笑顔に出会いたい…、遂に昨年の訪問で念願が叶うことになった。

初めて子どもたちと対面した日、こちらは度々目にする代表の写真で、みんなのことをすっかり知った気になっているため、3年生の教室でマリナを見つけて「ああ、マリナ～、元気？」と旧知の間柄のように声をかけてしまった。当然マリナは戸惑い顔。その様子を見て長倉代表が大笑い。でも、これがきっかけでマリナは休み時間のたびに少しずつ、少しずつ近づいて来てくれるようになった。

マリナは、この学校の先生でもあるムハンマド・ホラム先生の第四子。お姉ちゃんのアズィザ、ザルミナ(5年生)、アズィマ(4年生)、弟のナウィード(2年生)とともに山の学校に通う3年生。さらにその下に未就学のマリヤムという妹と、ザーヘル、ズィヤという弟がいる。マリナの家族が暮らす家は、山の学校から15分ほど下った集落にある。切り立った崖にへばりつくようにして建っている家々を崖の下から眺めると、こんな小さな子どもたちがよく通ってきているものだと、心の底から感心する。山の学校を訪問してから3日目、実際にこの崖を登ってマリナの家遊びに行くことになった。同行者は、通訳のオマールとドライバーのアクバル。

低学年の授業が終わり、マリナたちと歩いて家に向かおうとすると、オマールが「ミカ、俺もう疲れちゃったよ。車に乗って行こうぜ」と言う。代表の目が届かなくなると、楽ばかりしたがるヤツの悪い癖だ。「分かった。じゃあ、マリナの家の子みんな乗せていくぞ～」と言うと、オマールからそう告げられた子どもたちが、大歓声を上げながら車に乗り込んでくる。荷台にまでぎっしり乗った子どもたちと賑やかに数分間のドライブ。崖の下に車を止めて、集落の子どもたちと崖を登る。子



お気に入りの本についてお父さんに話すマリナ

どもたちは息も切らさず軽々と。情けないのは私と都会育ちのオマール。あつという間に置いていかれる。

山の傾斜に建てられた家に着くと、ちょうど集落の用水路の修復について話し合いが行われていた。10家族が暮らすこの集落は、ほとんどが近い親族同士。各家庭がお金を出し合い修復の費用を分担する。寄り合いが終わったところで、昼食を御馳走になる。この日のメニューはごはん、ナン、ゆで卵、生野菜サラダ、ポテトのトマト煮込み、ヨーグルトだった。客用に設えられた席にはお父さんのホラム先生、先生のお姉さん、オマール、アクバル、私が車座になって多めのおかずを盛られる。少し離れた所に設えられた子どもたちの席にはおかずが少ないのが目に入った。子どもを8人抱えてホラム先生の家はあまり豊かではないと聞かされていたので、無理を言って押しかけたことを申し訳なく思う。オマールに、失礼にあたらぬか尋ねてもらって、私のためにたくさん盛られたおかずの皿を持って、子どもたちの輪の中に入って一緒に食べる。食後のお茶を飲みながら、日本から買っていったチョコレートを取り出し、子どもたちと学校や日々の暮らしや好きなものの話をする。

マリナの生活は、朝6時に起きて羊や牛の世話。7時半に登校、12時半に帰宅して夕方まで宿題、家の手伝い、小さな子のお守り、お客さんの接待などをする。何もない時は大木にくり付けられた大好きなブランコで遊んだり、昼寝をしたりする。夕方5時頃水汲みをし家畜を家に連れ戻したあと、お母さんのお手伝い。8時に夕食、9時に就寝という一日だそう。実際に水汲みと、家畜の世話に付き合うが、小さな体で大きくて大事な仕事を担っているんだと思う。学校生活の中だけではなく、家族の一員、集落の一員として生きていく大切なことを日々学んでいる子どもたち。そんな姿がまぶしかった。

「じゃあ、今日はありがとう。帰るね」と告げると、家の外まで見送りに出てきて、何度も何度も上から「今日はお家に遊びに来てくれてありがと～！」と大きく手を振ってくれるアズィマとマリナ。割れた窓は強風ではためくビニールシートで覆われ、その窓の外にはピンクの花の鉢植えが置いてあった。この花が風で揺られるのを、窓からマリナが眺めていた光景が忘れられない。つましい暮らしの中にも、花で彩られた家族の心の余裕を垣間見た気がした。

山の学校訪問の最終日、新システムでの本の貸し出しが行われ、さっそくお気に入りの「さんびきのやぎ」の本を借りたマリナ。その本を嬉しそうにお父さんに見せるマリナと、娘のお気に入りの一冊を微笑みながら愛しそうにめくるホラム先生と、二人の間にある一冊の本が織りなすトライアングル。その美しさに息が詰まった。「うちには余裕はないけれど、子どもたちがいて、家族と一緒に暮らせる。それが私には一番大切なこと」。ホラム先生の言葉の意味が分かった瞬間でもあった。厳しく、優しく、愛情深いおとなたちのもとで育てている山の子どもたち。みんなの笑顔の輝きのわけが、実感として分かった気がした。この輝きが、決して消えませぬように。

長倉代表とマスの出会いが繋いでくれた、私たちと子どもたちとの出会い。この繋がりがますます大きく、深くなるようみんなで手を繋いでいきましょう。

文・写真／高橋美香

## 広がれ！パネル展のわ

広島県福山市 アフガニスタン山の学校写真・絵展示

4月8日～5月2日

「我々は奉仕する」の合言葉のもと、広島県福山市で活動している、福山久松ライオンズクラブです。今年の4月で結成以来25周年を迎え、記念事業として台湾屏東欣欣獅子会と合同で、山の学校へ車1台寄贈と長倉様の写真と子どもたちの絵の展示を行いました。福山市役所ロビーでは、大変多くの市民の方々に見ていただくことができました。NHK福山では地元ニュースにも取り上げていただきました。



ご覧になられた方から、寄付金の申し出や、毛布等の受付はやつてもらえないのか？など色々な声が寄せられました。

これも一重に長倉様をはじめスタッフの皆様のご協力と感謝申し上げます。(福山久松ライオンズクラブ・上田喜清さん)

## 大阪府河内長野市

2月22・23日

2月23日、長倉洋海さんのスライドトークの会を開催しました。22・23日の両日は、パネル展と、チャリティ展としてタシャコール(アフガニスタン山の学校支援の会)への寄付を目的とする会のメンバーとそこにつながる人たちの絵画、書、織物等の展示、販売を行いました。

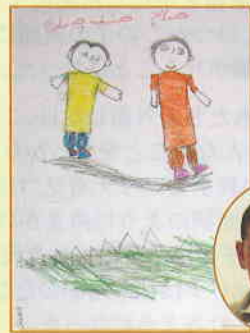
スライドトークには予想を上回るたくさんの方が来てくださり、講演後は長倉さんとの交流の場もつことができました。

パネル展、チャリティ展のほうも盛況で多くの方のご協力をいただきました。皆さんのアフガニスタンの子どもたちに対する温かい心を感じた2日間でした。(タシャコール・大崎宏子さん)

★チャリティ展の売り上げなど37万7943円のご寄付をいただきました。

## ポーランドの小さな仲間たち

サーレくん (11歳) 4年



ファトナちゃん (11歳) 4年



ジャン・アガくん (10歳) 4年



アフマド・ヌールくん (12歳) 4年



(写真／高橋美香、比留川征子)

「オマール(長倉代表)」

「オマールと日本のオマールの友だちのために描きました」

## 大和中ロータリークラブ様よりご寄付&初運営委員スライドトーク

3月、神奈川県の大和中ロータリークラブ社会奉仕委員会様より、本会の活動支援のために1500米ドルをご寄付いただきました。この支援金は、毎年新生たたちに配布するリュックサックと、緊急連絡用携帯衛星電話の購入に充てられる予定です。

また今回のお話を受け、3月6日に開催された同クラブ例会にてスライドトークを行いました。長倉代表に代わり、今回は運営委員の森、高橋、佐々木が赴き、山の学校の子どもの様子を皆様にご紹介。初の運営委員によるスライドトークとなりました。

## 事務局から

- 2008年度分割会費の郵便振替用紙を同封させていただきましたので、指定期日までに納入をお願いいたします。
- 不要切手と書き損じはがきをまた多数ご提供いただきました。早速今回の会報送料に使わせていただいています。ありがとうございます。引き続きご協力をよろしく願っています。
- 福山久松ライオンズクラブ様と大和中ロータリークラブ様のご支援に対して本会から感謝状を贈呈いたしました。
- 住所変更をされた場合は必ず事務局にご連絡をお願いいたします。

## パネルの貸し出しをしています！

子どもたちの笑顔の輪をひろげていきませんか？小さなスペースでもパネル展をしていただけます。

【レンタル料金】  
15枚 1万円  
30枚 1万5千円

パネルに加えて、山の学校の子どもたちが描いた絵など無料でお貸しできるものもありますので、詳細は事務局までお問い合わせください。

